

# 貧困の連鎖

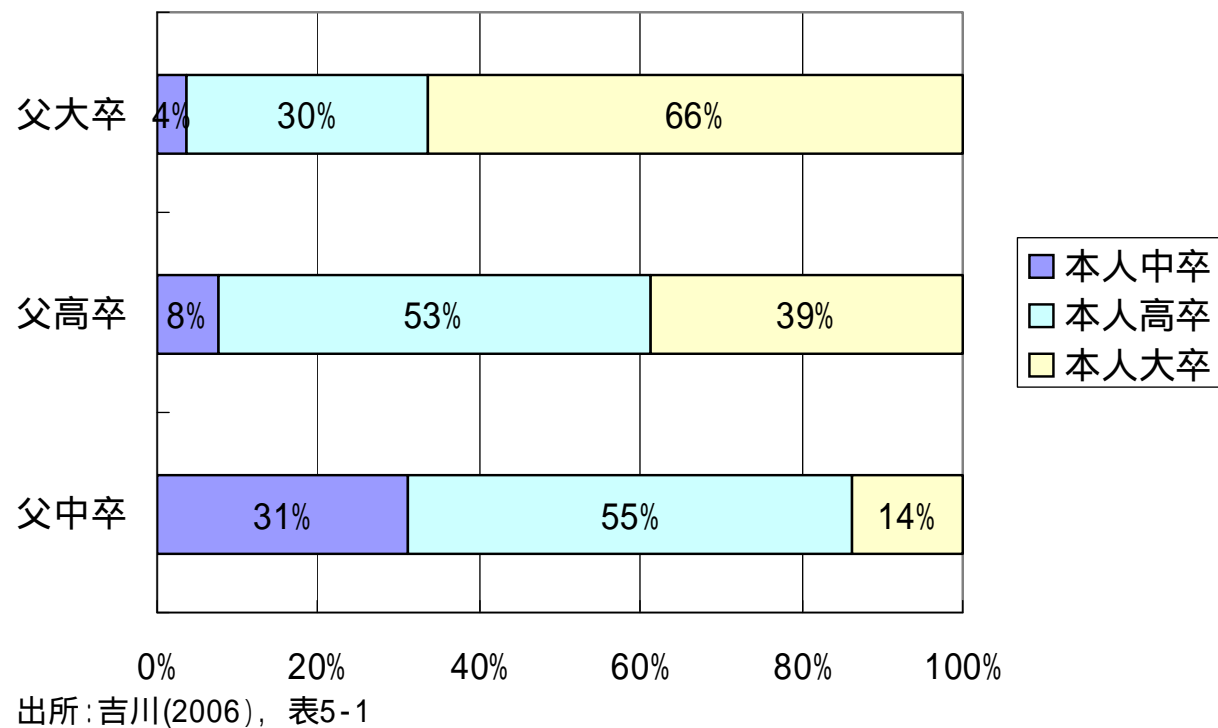
- ◆ 子ども期の経済状況とその時点の子どもの状況との関係は明らか
- ◆ しかし、子ども期の貧困は、子ども期だけで収まらず、この「不利」は一生その子につきまとう可能性がきわめて高い

(諸外国では長期にわたって子どもをフォローした研究が多数行われており、子ども期の貧困が何十年後の成人期の健康や所得と関係していることが報告されている)

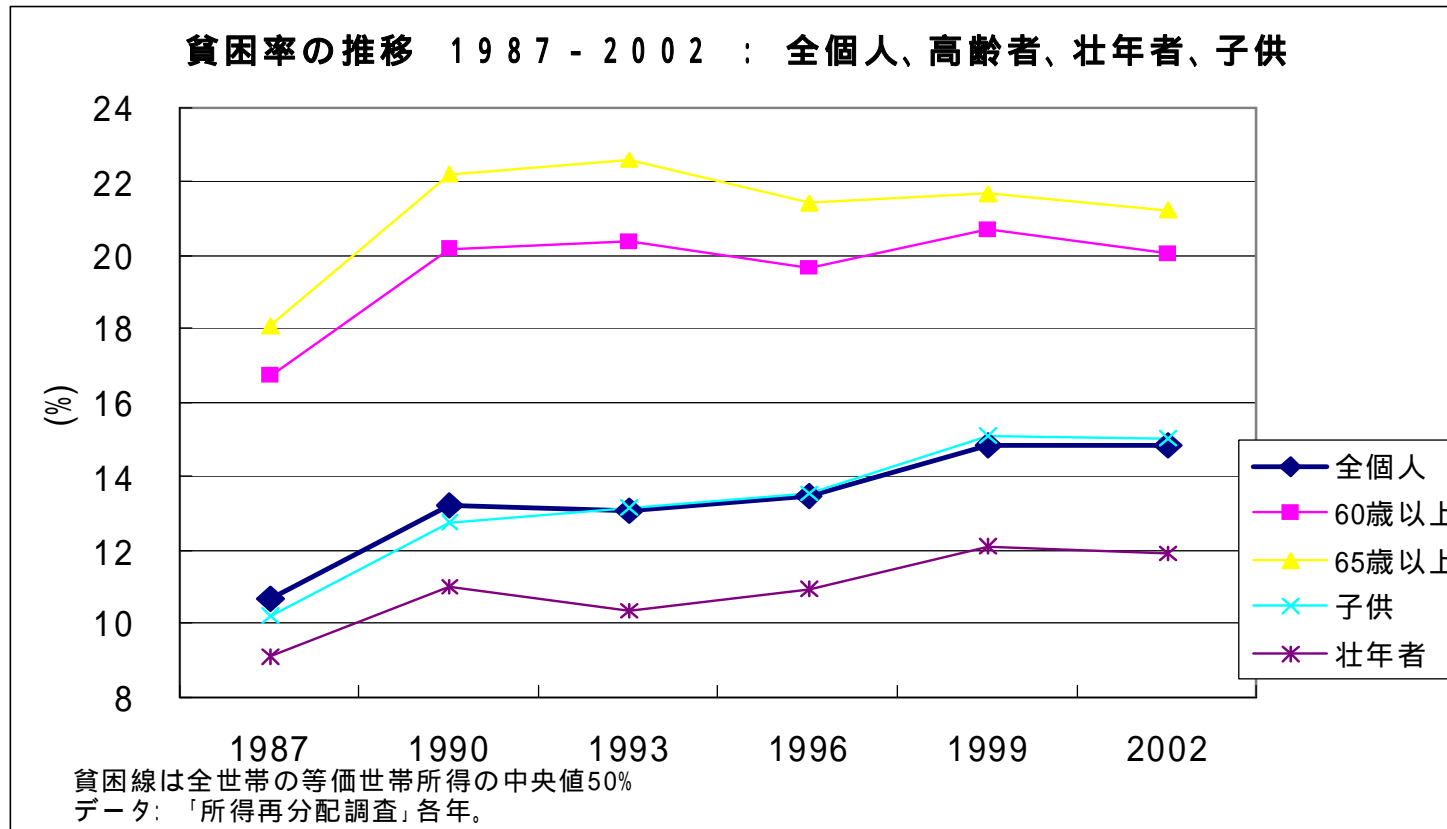
- ◆ 子ども期の貧困が、大人になってからの所得や就労状況にマイナスの影響を及ぼしているのだとすれば、その「不利」が次世代に受け継がれることは明らか

# 親の学歴と子の学歴、親の職業と子の職業には関連がある

図1 - 6 学歴の世代間関係 (20-69歳男女)



# 貧困率の推移 1980年代～2000年代



(出所: 阿部(2006))

- 1980年代から2000年代にかけて、子どもの貧困率は約5%増加。

# 母子世帯の貧困率（子ども数ベース）

## 子どもの属する家族構成別：子どもの貧困率

	構成比(割合)	貧困率(%)
両親と子のみ世帯	63.2%	11.1%
三世帯世帯	28.5%	10.8%
母子世帯*1	4.1%	66.4%
父子世帯*1	0.6%	18.8%
高齢者世帯*2	0.1%	53.3%
その他の世帯	3.4%	29.2%

\*1 親1人と20歳未満の子のみの世帯

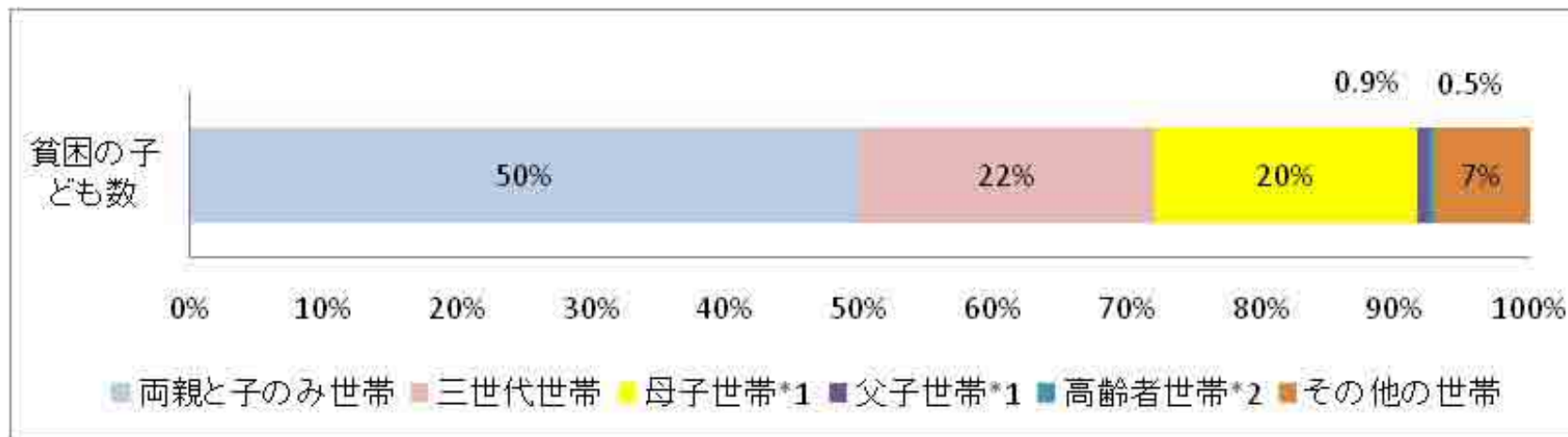
\*2 高齢者世帯は標本数が15と少ない

出所：『平成16年国民生活基礎調査』

(出所：阿部(2008)『子どもの貧困』岩波書店)

- 母子世帯の貧困率は突出している
- 父子世帯の数は少ないものの、見逃せない高さの貧困率
- より広義のひとり親世帯の定義を使うと構成比が増える（約17人に一人、2002年）。

# 貧困の子ども数でみると：

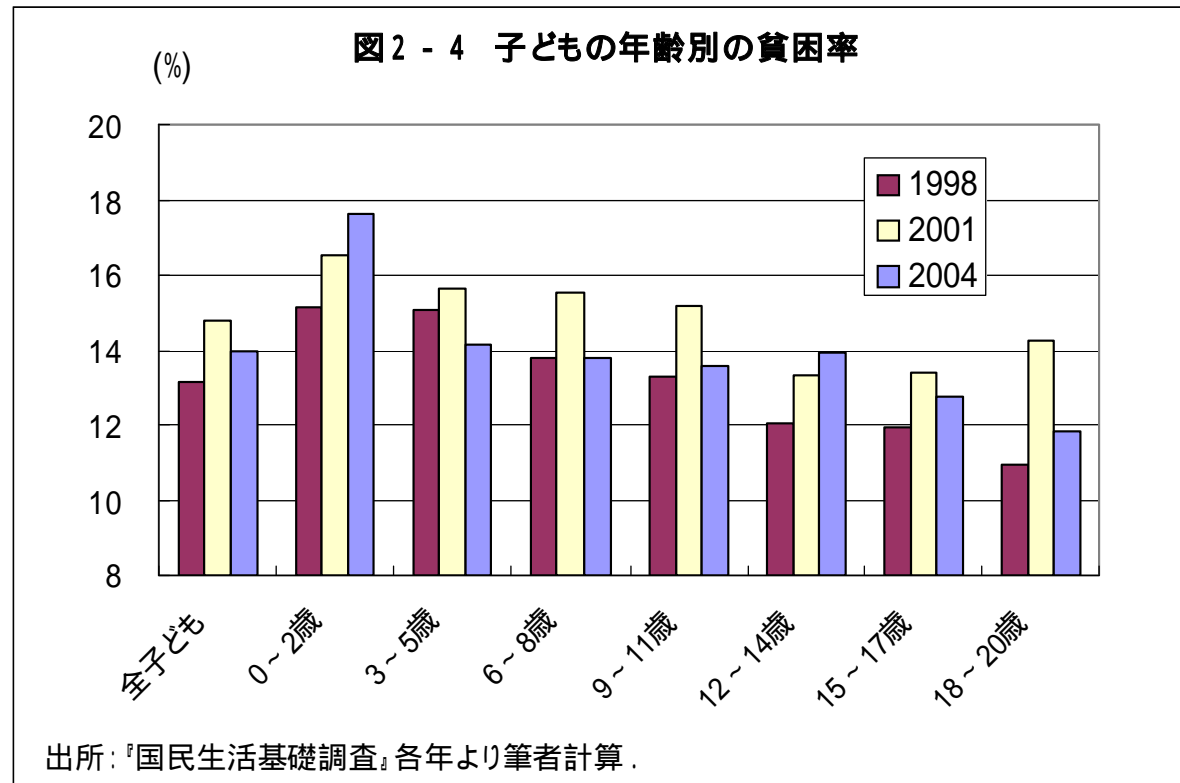


- 両親と子のみ世帯に属する子どもは、貧困の子どものうち約5割
- 母子世帯は、約2割

# 子どもの貧困率の国際比較



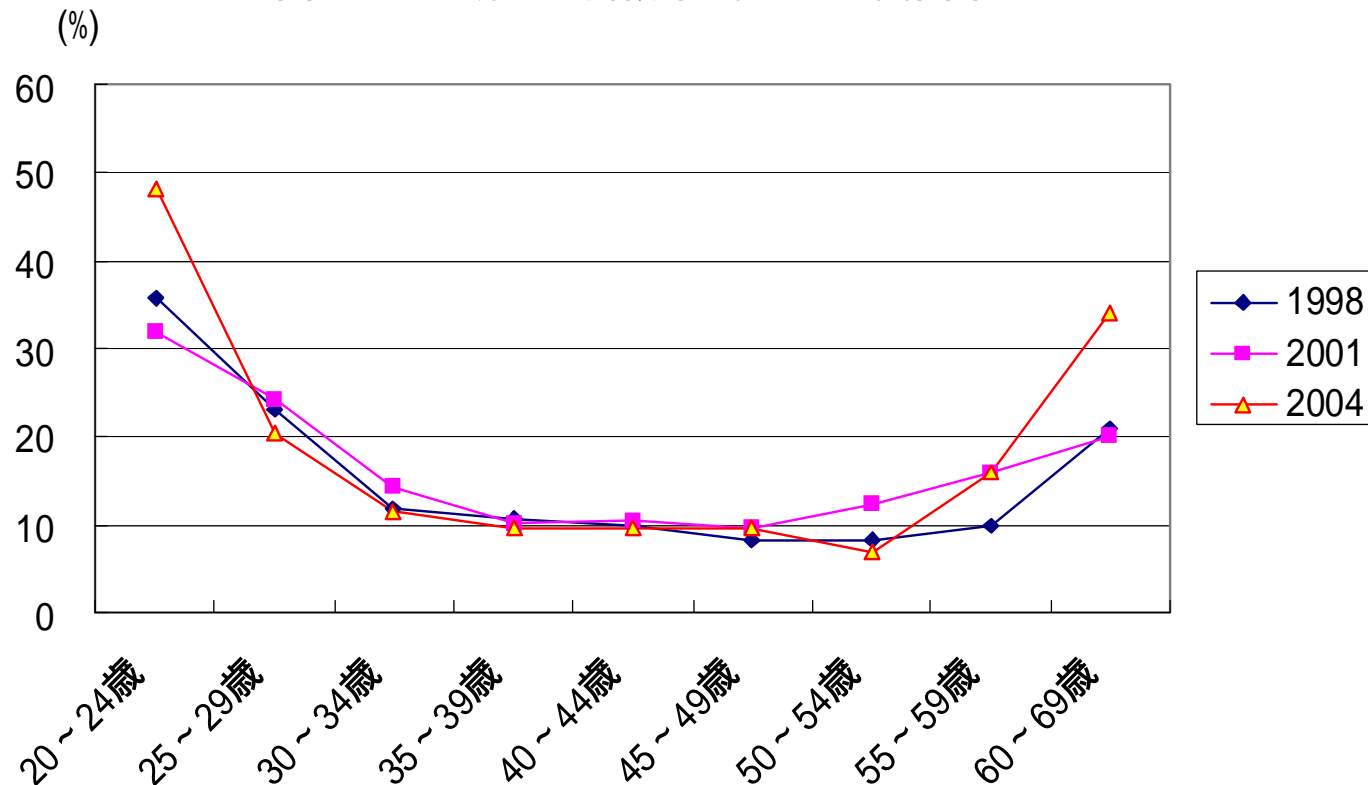
# 子どもの年齢別の貧困率



- 子ども全体の貧困線で見ると、どちらかというとも年齢と共に貧困率は下がる
- 特に0から2歳児の貧困率が高く、上昇している（他の年齢層は減少のみ）  
(出所：阿部(2008)『子どもの貧困』岩波書店)

# 父親の年齢別の貧困率はU字型、 U字の両端で貧困率が上昇

図2 - 6 父親の年齢別 子どもの貧困率



出所：厚生労働省『国民生活基礎調査』から筆者計算。

(出所：阿部(2008)『子どもの貧困』岩波書店)